

黙示録4章 「天にある御座」

1A この後に起こる事 1

2A 御座 2-6

1B 光の中におられる方 2-3

2B 長老たちの座 4

3B 火のついた七つのともしび 5

4B ガラスの海 6

3A 礼拝 6-11

1B 四つの生き物 6-8

1C 神の創造の栄光 6-7

2C 聖なる、永遠の神 8

2B 二十四人の長老 9-11

1C ひれ伏し 9-10

2C みこころのゆえの存在 11

本文

私たちの学びは、黙示録4章に入ります。ここでは、「天にある御座」という題名です。これは、黙示録にある、最も骨格になっているところです。天にある御座から、地に対する災いが下ります。そして、最後はこの天が、新しくされた天地に降りてきて、天の都エルサレムになります。

また、私たちの信仰にとって、核になっているところです。主が天におられ、そこでとこしえに続べ治められているという真理を知ることは、どんな大きな禍が起こっても、私たちに平安を与えます。「詩 115:2-3 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。」日本人も、時々、人がだれも見えていなくとも、お天道様が見ていると言います。けれども、私たちの主は、何となく見ているのではなく、世の始まりから終わりまで、とこしえに、すべてのことを、ご自分の願われるままに動かしてこられたのです。主が御座におられるということをもって、私たちは確信を持ち、強くなれるのです。

1A この後に起こる事 1

¹ その後、私は見た。すると見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラツパのような音で私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」

場面は、主イエスがご栄光の姿で、パトモス島にいるヨハネに現れ、アジアにある七つの教会に

対して、語るべきことを与えたところです。すると、天に入る「開かれた門」がありました。かつて、ステパノが、サンヘドリンでみことばを語り、人々から石打で殉教する前に、「使徒 7:56 見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言っていました。主なる神が御座に着いておられ、その右にキリストのおられるところが天であり、天が開けたので、そのお姿を彼は見る事ができました。ヨハネも今、主が御座に着いている天の門が開かれています。

そして、「ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた」とあります。ヨハネが初めに、主の日に御霊に捕えられて、「私のうしろにラッパのような大きな声を聞いた。」とありましたね(1:10)。イエス様でしたが、ここでも、「あの最初の声があった」とあるように、イエス様の声です。1章の、その時の学びでもお話ししましたが、ラッパの音は、主がシナイ山に天から降りて来られる時にも、角笛が鳴っていました。教会に対しては、主は天から降りて来られて、私たちを引き上げて空中でお会いになる時、「1テサロニケ 4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに」とあります。

そして、「この後必ず起こることを、あなたに示そう。」とされていますね。ここが大事です、思い出してください、主の日に對してヨハネは御霊に捕えられて、イエス様のラッパのような声を聞きました。そして、栄光の姿の主が現れて、倒れ込んでしまいましたが、イエス様は励まし、そして、こう言われます。「1:19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。」見たことというのは、その栄光の姿のイエスを見たことです。それから、「今あること」というのは、七つの教会のことです。そして、「この後起ころうとしていること」というのが、今、主がここ4章1節で、声かけをしていることです。つまり、今あること、諸教会に対することの後で、起こることをこれから示すのだということを、イエスは、言われています。つまり、教会全体に対して主がお語りになられて、それが今のことで、4章以降で、これから後に起こることとして語られます。

2A 御座 2-6

1B 光の中におられる方 2-3

² たちまち私は御霊に捕えられた。すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。

1章でヨハネが御霊に捕えられたように、ここでも捕えられました。開かれた天の門を通過して、まるでテレポートのようにして、天に来ました。これはちょうど、預言者エゼキエルが、バビロンの離散の地において、御霊によって引き上げられてエルサレムの神殿にまで連れて行かれたのに似ています。御霊によって、引っ張られるように移動しています。

そして、天には御座があります。王が玉座に着いておられる姿でありました。この御座から、すべてのものが発しています。この方の主権と力から、万物のうちに免れるものは何一つありません

ん。「すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように、アーメン。(ロマ 11:36)」そして、私たちは、御座におられる方の前で、これから見る長老たちたちのように、ひれ伏している、礼拝しているのです。

³その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。

碧玉というのは、青白いダイヤモンドのような宝石です。赤めのうは、血のような赤色の宝石です。そして次に、「エメラルド」があるのですが、碧玉である青、赤めのうの赤、そしてエメラルドの緑を合わせると、光の場合には白になります。つまり、これらは神ご自身が光の中に住まわれていることを表しています。「1テモテ 6:15-16 キリストの現れを、定められた時にもたらしめてくださる、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16 死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。この方に誉れと永遠の支配がありますように。アーメン。」このように、私たちは神を見る時に、そこに形はなく、光の中におられることを見ることでしょう。

主の御座について、私たちは、その姿を垣間見るような箇所を聖書で見ることができます。主がシナイ山に降りて来られた時、長老たちを引き寄せて、そこで神と食事をした場面があります。「出 24:10 彼らはイスラエルの神を見た。御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった。」そして、エゼキエル書 1 章の最後の方に、こうあります。「1:26 彼らの頭上、大空のはるか上の方には、サファイアのように見える王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。」このように、主がおられるところに共通のものがありますね。それは真っ青な大空のようなものであり、またサファイアのように光り輝いています。

この神の栄光の輝きは、宝石によって表現されてきました。出エジプト記 28 章には、大祭司の装束についての主の命令が書かれています。大祭司は胸当てを着けなければいけませんが、その胸当てに宝石がはめ込まれます。そこに、碧玉と赤めのうがあります。そして、エゼキエル書 28 章には、主の御座のそばにいる御使いケルブの姿が出てきますが、そこにも、碧玉、赤めのう、そしてトパーズもあります。このように、神の御座は光り輝いています。

そして、「虹」ですが、これはエゼキエル書 1 章において、主なる神の御座のところにも出ていた情景でありました。「1:28a その方の周りにある輝きは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、まさに【主】の栄光の姿のようであった。」エゼキエル書において、神のエルサレムに対する裁き、バビロンによって滅ぼされる預言が始まり、しかし神殿が破壊された後に主がそれを建て直す約束を与えられました。神が裁きは行われても、ご自身の契約と約束をイスラエルに対して守られることを示したものでした。ノアに対しての契約において、虹が印となっていたのもそのためです。

黙示録において、これから地上に裁きを神が下します。しかし、御国をもたらすという約束を必ず果されます。私たちの中で、いかに困難があっても、また混乱や混沌としていても、主が必ず約束を守られる方であることを思い出すことは大切です。

2B 長老たちの座 4

⁴ また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。

御座には宝石のような輝きがありましたが、その周りには二十四の座があります。そして、座には、長老たちが座しているのですが、彼らはそれぞれ白い衣をまとっています。そして頭に金の冠をかぶっています。

「座」に着いているということは、権威と力が与えられていることが分かります。3章には、ラオデイキアにある教会の勝利を得る者たちに対して、イエス様は、「3:21 わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」とあるように、です。そして、「二十四人」という数字は、歴代誌第一 24 章に出できます。祭司たちが組になって分けられており、その組の数が 24 になっています。教会は、「祭司の王国」と1章で呼ばれていましたから、これらが、地上から贖われた者たちを代表していることが分かります。

そして、「白い衣」を着ています。黙示録の中で白い衣を着た人々は、子羊の血によって洗われたので白くされているとあります(7:14)。そして、「金の冠」をかぶっていますが、スミルナの教会やフィラデルフィアの教会に、冠を与える約束をイエスがしています。王冠ではなく、競走によって獲得する選手のかぶるような冠です。

彼らは「長老」です。聖書では、人々を治める指導者です。イスラエルの民にも、教会にも長老がいました。21章の天のエルサレムには、門には十二部族の名が記されていて、土台には十二使徒の名が刻まれています。そこで、二十四人の長老たちは、神の民全体を代表していると考えてよいのではないかと思います。

この長老たちの務めを理解するのに、ルツ記に出てくる長老たちはとても興味深いです。モアブ人ルツが、姑ナオミについて、ベツレヘムに行きました。そして、有力者ボアズの目の留まり、ボアズがルツを自分の妻にしようとします。その法的手続きの様子が、ルツ記 4 章にあります。それを見ていて、証人となったのが町の長老たちです。(4:11-12)長老たちは、ルツから、メシアとなる男の子が現れますようにという祈りと預言をしています。事実、彼女からダビデが出て来て、ダビデからイエス・キリストが現れました。

私たちは黙示録 5 章で、キリストが巻物を神から受け取り、この方が世界を贖うことになることを長老たちが目撃する場面を読みます。ルツ記は、神がキリストによって世界を贖うけれども、そのために教会を花嫁としていることを示していることを見ていきます。ここでは、長老たちがその場面を目撃し、その証人として立っているのだということです。

3B 火のついた七つのともしび 5

^{5a} 御座からは稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた。

シナイ山のところに、天から主が降りてこられた時に、イスラエルが恐ろしくなったことを思い出してください。「出エジプト 19:16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあって、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」このような姿は、黙示録で何度となく目にするようになります。これは、主が畏れ多い方であることを示しています。

稲妻や声や雷鳴が轟いている時に、私たちは、圧倒的な力の差を抱いて、ただその自然の畏敬に、恐れひれ伏すのではないのでしょうか？「詩 29:3-10 【主】の声は水の上にある栄光の神は雷鳴をとどろかせる。【主】は大水の上におられる。4 【主】の声は力強く【主】の声は威厳がある。5 【主】の声は杉の木を引き裂き【主】はレバノンの杉を打ち砕く。6 それらの木々を子牛のようにレバノンとシルヨン若い野牛のように跳ねさせる。7 【主】の声は炎の穂先をひらめかせる。8 【主】の声は荒野を揺さぶり【主】はカデシュの荒野を揺さぶる。9 【主】の声は雌鹿をもたえさせ大森林を裸にする。主の宮ではすべてのものが「栄光」と言う。10 【主】は大洪水の前から御座に着いておられる。【主】はとこしえに王座に着いておられる。」

^{5b} 御座の前では、火のついた七つのともしびが燃えていた。神の七つの御霊である。

ヨハネは、1 章で、七つの教会に対して、三位一体の神にある挨拶をしましたが、その時に、「神の七つの御霊」がおられました。(1:4-5)七は完全数を現わしていて、神ご自身の完全な御霊というような意味合いがあります。

ここでは、この方が、「火のついた七つのともしび」として現れておられます。聖霊によるバプテスマの約束、バプテスマのヨハネは預言しましたが、その時に、聖霊がバプテスマだけでなく、火によるバプテスマも授けることを話しましたね。「マタ 3:11b-12 その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。12 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」五旬節の時に、炎の舌のようなものが現れて、弟子たちにとどまり、彼らは聖霊に満たされました。そして、それはこれからの主の火による裁きを予兆していました。

4B ガラスの海 6

^{6a} 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。

御座の前にある、水晶のようなガラスの海です。黙示録の中では、15 章 2 節にも登場します。昔は、王が自分の玉座の前に、似たようなものを作っていました。王とその臣民と隔てるためにそうしていました。それによって王が民とは超越していること、絶対的な主権を持っていることを示していました。先ほど読んだ、主の御座のところが、透き通ったサファイアのように、大空のようになっていたことが書かれていましたね。王との間にある隔てです。

ところで、この天の御座の姿は、ユダヤ人たちには驚くものではありませんでした。主がすでに、ダニエルによって明らかにしておられたからです。「ダニ 7:9-10 私が見ていると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髪は混じりけのない羊の毛のよう。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、火の流れがこの方の前から出ていた。幾千もの者がこの方に仕え、幾万もの者がその前に立っていた。さばきが始まり、いくつかの文書が開かれた。」

3A 礼拝 6-11

こうして、永遠の王の前に御霊がおられ、そして周りに二十四人の長老たちがいます。そこで、御座のすぐそばに、創世記の時から明らかにされてきた、御使いが出てきます、ケルビムです。

1B 四つの生き物 6-8

1C 神の創造の栄光 6-7

^{6b} そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。⁷ 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。

「御座のあたり、御座の周りに」とありますが、おそらく、長老たちよりも御座に接近しているところでしょう。この姿を見ていると、二つの幻が重なっています。一つは、エゼキエル 1 章と 10 章に出てくるケルビムの姿。次は、イザヤ 6 章に出てくるセラフィムの姿です。せっかくだから、エゼキエル 1 章の一部とイザヤ 6 章の一部を読みましょう。まず、エゼキエル 1:4-11 から：

⁴ 私が見ていると、見よ、激しい風が北からやって来た。それは大きな雲と、きらめき渡る火を伴い、その周りには輝きがあった。その火の中央からは琥珀のようなきらめきが出ていた。⁵ その中に生きもののようなものが四つ現れ、その姿は次のようであった。彼らは人間のような姿をしていたが、⁶ それぞれ四つの顔と四つの翼を持っていた。⁷ その足はまっすぐで、足の裏は子牛の足の裏のようであり、磨かれた青銅のようにきらめいていた。⁸ その翼の下から人間の手が四方に出ていた。

また、その四つの生きものの顔と翼は次のようであった。⁹ 彼らの翼は互いに触れ合っていて、進むときには向きを変えず、それぞれ正面に向かってまっすぐに進んだ。¹⁰ 彼らの顔かたちは人間の顔で、四つとも右側には獅子の顔、四つとも左側には牛の顔、さらに四つとも鷲の顔を持っていた。¹¹これが彼らの顔であった。彼らの翼は上方に広げられ、それぞれ、二つは互いに触れ合っていて、もう二つはそれぞれのからだをおおっていた。

それでは、次にイザヤ書 6 章です、「6:1-3 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、2 セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、3 互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」

一つはケルビムと呼ばれ、もう一つはセラフィムと呼ばれています。ここ黙示録 4 章では、エゼキエル書やイザヤ書が合体したようになっていて、細かい描写は一致していません。これは、同じ御使いではないか？という意見があります。これは私に意見ですが、天にあるものは、人がどう見るかによっていろいろ変化して見えるのではないか？ということです。あるいは、御座のすぐそばには、ケルビム、セラフィム、そしてここにある四つの生き物がそれぞれいる、という見方もあります。

これがケルビムと同じだとしてお話ししますと、ケルビムは創世記の初めから登場します。エデンの園で、東の入り口を炎の剣で守っていたところから出てきます。そして、実はエゼキエル書 28 章に、ケルビムの中で墮落した者がおり、それがサタンではないかと思われる箇所があります。「28:13-14 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。14 わたしは、油注がれた守護者ケルビムとしてあなたを任命した。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。」ですから、ケルビムは主ご自身のすぐそばにいて、御座を守る、守護者であることが分かります。

人間的に言うと、王のそばで守る近衛兵のような存在です。バッキンガム宮殿を警護する近衛兵がいますね？置物のように見えるので観光客がいつも一緒に写真を撮りますが、近づきすぎると大声で怒られます。観光のためではなく、女王を守るためにいる守備隊だからです。

しかし、ケルビムは守護者だけではありません。幕屋においても、神殿においても、中心にケルビムが彫られていますね？契約の箱の上の宥めの蓋、それから、神殿の本堂の中の壁です。詩篇には、「ケルビムの上に座しておられる方(99:1)」とあります。宥めの蓋で彫られているケルビムは、翼を重ね合わせています。それは、礼拝しているんですね。礼拝を絶えず行い、他の被造物も彼らの礼拝に導かれて、自分たちも礼拝する、つまり礼拝の導き手でもあるのです。

本文に戻りますと、「前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた」とあります。これは、要は「見ている」姿です。主ご自身が。万物を支配されている中で、絶え間なく、被造物の世界を見ておられること、すべてを見通して、知っておられることを表しています。

それから、それぞれの顔がありますね。それぞれの意味ですが、最も考えられるのは、「被造物の長」だということです。主は五日目に鳥を造られ、六日目に家畜や獣を造られたとあります。獅子は、獣の中での長です。そして雄牛は、家畜の中での長であります。そして人間は、神のかたちに造られた被造物の長です。それから、鷲は鳥における長です。

初代教会の指導者らは、これを四つの福音書の特徴であると話してきました。獅子はマタイの描く王なるキリスト、雄牛はマルコの描く僕なるキリスト、人間はルカの描く人としてのキリスト、鷲はヨハネの描く神の子としてのキリストということです。けれども、ちょっと読み込み過ぎではないかと思えます。聖書的には、創世記 1 章にある神の天地創造の栄光を表しているのではないかと思えます。神が、それぞれの生き物を造られて、ご自身のかたちに造られた人がいます。

2C 聖なる、永遠の神 8

^{8a} この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた。

四つの生き物には、六つの翼があります。エゼキエル書 1 章のケルビムは四つの翼でしたが、イザヤ 6 章のセラフィムが六つの翼を持っています。これは、二つで飛び、二つは体を覆い、二つは天に上げるために用いられます。まさに、礼拝の姿です。

^{8b} そして、昼も夜も休みなく言い続けていた。「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」

「昼も夜も休みなく言い続けていた」ということは、天において疲れることはないことが分かります。

「聖なる、聖なる、聖なる」というのは、神の聖さを強く強調しています。先ほど読んだイザヤ書ではセラフィムが、「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」と叫んでいます。神はすべての汚れから隔絶された方であり、被造物と混じることは決してありません。これが黙示録に啓示されている、神のお姿です。神が聖なる方、正しい方であるから、この世に対して裁きを行われます。

そして、「主なる神」と呼んでいます。この神こそが主権を持っておられます。そして、「全能者」です。聖書全体に貫かれている神のご性質ですが、黙示録では特に、この呼び名が神に使われています。どんなことが起こっていても、主は必ず、はるかにすぐれた力をもって、それらの勢力を

滅ぼすことができになります。

最後に「昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」であります。この方が、初めから支配者であられ、今も、そして将来に至るまで支配しておられます。永遠の王なのです。神が永遠であることも、黙示録では大きく啓示されています。地上の王は倒れます。けれども、この方は決して倒れることはありません。永遠に御座におられる方です。

これら聖なる方、主なる神、全能者、そして永遠に生きておられる方、この方が御座におられるというのが、黙示録の強調している、私たちの主の姿です。そしてイエス・キリストがこの方と一つなのですが、それは5章で紹介されています。

2B 二十四人の長老 9-11

四つの生き物の礼拝に呼応して、二十四人の長老たちが礼拝します。

1C ひれ伏し 9-10

⁹ また、これらの生き物が栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にさげるとき、¹⁰ 二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。

「生き物が栄光と誉れと感謝」を献げています。栄光は、元々、重さを意味しています。重力が働いて、重いところに物が引き寄せられるのと同じように、主ご自身に、すべての原因、過程、目的が引き寄せられる時に、栄光となります。ロマ書で「11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」そして、誉れは、栄誉という言葉があるように、尊厳を含んだ言葉です。主から与えられた尊厳をお返しします。それから、感謝を献げます。

長老たちは、三つのことをしています。第一に「ひれ伏す」ことです。これは、自分の思いや願い、全てのことを主なる神に服従させることです。明け渡すことです。次に、「礼拝」します。拝む、と言ったらもっと分かり易いです。自分の靈魂のすべて、人格のすべてを相手に渡してしまうことです。そして、三つ目に、「冠を・・・投げ出」すことがあります。冠は、自分が神から与えられた報いである栄光でありました。それを主なる神の前では、全て投げ出してしまいます。私たちのものでは、元々ありませんから、主なる神には栄光や報いは投げ出すのです。

これが礼拝の姿です。ダビデが、ペリシテ人と戦って、部下である三人の勇士がベツレヘムから持ってきた水を、土に注いでしまいました。また、マリアはイエス様が十字架に付けられる前に、高価な香油を主の足に注いでしまいました。自分のものに固執せず、主の前で何でも投げうって渡

してしまう姿です。

2C みこころのゆえの存在 11

¹¹「主よ、私たちの神よ。あなたこそ 栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」

ここが、万物の根本といってよいでしょう。万物が、主を礼拝すべきであるし、将来はすべてが主の前にひれ伏します。

「主よ。われらの神よ。」という「主」はもちろん、自分が服従する相手です。次に、「神よ」とありますが、神とは名前ではなく、「自分を突き動かす情熱」と言い換えても良いかもしれません。自分が行なっていることを、行なわせているその情熱は何なのか。何が自分を突き動かしているのか？そして、この方が、「栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」ということです。すべてのことは、神の栄光のためにあります。すべての功績は神にあるので、誉れも神にあります。そして、神こそが全てをことごとく動かす力を持っておられます。

そして、「あなたが万物を創造されました。」であります。この真理を受け入れていかないというのが、罪の始まりであり、終わりの日に裁かれる罪です。黙示録に強調されているところであり、ラオディキアの教会は、万物の根源である方を認めず、自分自身で間に合っているという態度を取っていました。そして大患難の時には、すべてを神が支配していることを最後まで認めない、悔い改めていない姿が出てくるのです。「16:9 こうして人々は激しい炎熱で焼かれ、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。」

そして、万物を創造されただけでなく、「みこころのゆえに、それらは存在し、また創造された」ということです。ここでのみこころは、「あなたの喜び、好み」と訳すことができます。主がご自分の願われているように、思いのままに、ということです。つまり、神は私たちを喜ばすために存在しているわけではありません。ご自分を喜ばすために、私たちが存在しているのです。自分が喜ぶのではなく、神が喜ぶためです。

これがある意味、この世代に最も嫌われる真理ではないかと思えます。つまり、自分の幸せ、自分の喜び、自分の選択、自分のもの、こうやって自分の権利を主張することこそが、最も正しいこととされています。しかし、万物の根源は神にあり、私たちはこの方に造られたのであり、自分の幸せでなく、神ご自身の喜び、自分の選択ではなく、神の主権の選び。自分の所有ではなく、神の所有。このことを認めて、ひれ伏し、服従するところに、結果として私たちの魂は喜び、平安になり、安心するのです。